

葬儀の風習

WWW. より

はじめに・・・

葬儀とは葬送儀礼の略語であり、葬とは、「死者への礼」である。死者に対しての「礼」は、生に対する「礼」でもあります。

『諸行無常、生者必滅、会者定離』は自然の習いとは申せ、解脱することの困難な俗人にとって、肉親の死ほど悲しいものはありません。これまでこの眼で見、やさしい眼差しで話しをしていた父母が突然、ものいわぬ人となり、永遠の別離となるのが死という厳粛な事実であり、苛酷で冷淡な人生経験です。しかし、避けて通ることの出来ない宿命でもあります。

葬儀は、ただ死者との別れを告げる式だけではありません。浄土へお送りするとともに、死者へ心からの礼を尽くして葬り、生命の尊さ、生の喜びを知り、人間は大自然の中で生きさせていただいている事に対しての礼を尽くす事でもあります。

遺族の「手厚く誠を尽くす心」こそ、故人への至上の「愛」であり「供養」です。一般に葬制に関する「しきたり」は宗教宗派の異なりや、地域社会の風俗風習の違い、葬儀形式、規模によっても差異が生じます。それぞれの施主の立場において全てが「オリジナル」といっても過言ではないでしょう。しかし、古来より伝承され、地域の習俗と宗教、霊魂観念等が集合されて今日に至っていますが、死者を送る様々な「しきたり・意味」を忘れて、形ばかりになっているものも少なくありません。葬送儀礼の本意を忘れることなく、死者への礼、誠を尽くす心を供えたいものです。

大般涅槃経

日本で現在行われている仏教葬儀で見られる慣習のルーツは、釈尊の涅槃直前の様子や釈尊の葬儀などを起源としているものといわれ、釈迦の入滅を叙述し、その意義を説く経典類の総称で、阿含経典類から大乘経典まで数種あり、初期仏教中で、釈尊の最後の旅からはじまって、入滅に至る経過、荼毘（だび）と起塔について叙述する経典

お釈迦さま最後の旅、生まれ故郷カピラ国（現在のネパール）の方角へ向かわれる途中、マガダ国を出てガンジス川を渡り、ヴァイシャリーを過ぎ、パーヴァーというところで、鍛冶工のチュンダ（純陀）の供養を受けた後、お釈迦さまは重い病にかかられました。

「ある日、純陀は、自分の所有する果樹園に高齢の釈迦とその弟子一行が休まれていることを知り、偉大な尊者の存在に驚喜して一行を自分の家に招く。釈迦は純陀のもてなしを喜ぶと共に、彼に教典を説く。純陀は一行を手厚くもてなし、翌日の朝食を準備する意向を伝えると、釈迦はこれを快諾し、翌朝、弟子達と共に純陀宅を訪れ招きに預かる。

純陀が差し出した料理は、Suukala-maddava（スーカラ・マッダヴァ）といい、スーカラとは「野豚」、マッダヴァとは「柔らかい」と訳される。これがどんな料理だったのかについては諸説入り乱れており、キノコを使った料理とも、豚肉を使った料理とも言われ判然としない。出家僧であり、しかも体力を消耗した高齢の釈迦に対して肉料理を差し出すことは疑問であり、トリュフのように豚がキノコを好む性格を利用して採取するキノコもあるので、北伝仏教及び漢訳経典では、豚が好む種のキノコを使った料理というのが有力と言われている。」

だが、純陀の料理を食べた釈迦はその直後激しい腹痛を訴える（食中毒の症状と思われる）、高齢で激しい食中毒の症状を現した釈迦は遂にカクッター川のほとりで倒れ伏し、純陀に床を作るよう指示しそこにしばし休まれ、カクッター川において最後の沐浴をされる。

クシナガラに入口にバツダイ河があり、その辺までたどり着いたが一步も動けなくなってしまった。バツダイ河の東側の堤一体は沙羅双樹の林となっており、釈尊はこの林の中で休みたいといわれた。バツダイ河は北に水源があり、南に向かって流れており、この河の東側にある沙羅双樹の林のなかで、頭を北、足を南、右脇を下、顔を西に向け、両足を重ねて横になり入滅されたといわれます。（wapedia：純陀より）

1. 枕飾

納棺（のうかん）するまでの遺体は、北枕といって、頭を北にして座敷に安置します。かつては死者のために喪屋をつくり、出産にさいしては産屋を設けて、そこに隔離されました。

布団は薄い掛け布団に敷き布団、敷布には白の敷布を用います。掛け布団は上下逆さにして掛け、掛け布団の上には守り刀を置きます（用いない宗派もあります）。北枕に寝かせて屏風が立てられると次に故人の枕飾りをします。まず白木の台を置きます。小さな机で代用する場合には白い布をかけます。その上に花立てに一本花、一本線香、一本ローソク、枕団子、枕飯、浄水、四華を供えます。ローソクの光は仏の光明を意味し、冥途への道を明るく照らし出す為といわれます。

神棚に白紙を張ります。（この白紙は四十九日又は一周忌がすんだら主人がこれを取りはずして主人自ら川に流します。）

2. 神棚封じ

昔から神道では死や出産などの穢れを避けることから、死の穢は神棚におよばないようにと行うことで行われます

かつては死者のために喪屋をつくり、出産にさいしては産屋を設けて、そこに隔離されました。江戸時代後期の国学者、平田篤胤（1843 没）は、「家のなかがかげがれるときは、神棚もけがれるのは、やむをえないことである。私の家では父母の喪であれば 50 日、祖父母の喪であれば 30 日の間、神拝をやめます。忌明けには身を清めて、そのあと礼拝します」と記しています。

家族の誰かが死亡した場合、死の忌みを嫌う神棚には、白の紙を貼って封印することを「神棚封じ」といいます。古くは、家の者はけがれているため神棚封じは第三者（忌みがかかっている他人）がするものとされてきました。この白の紙は忌明けまで貼っておき、忌明けとともに取り除きます。この間は神棚は閉ざされています。

旧美里町毛原では、満中陰法要の後、神職が喪家に参り神開き（神祭り）が行われます。

3. 北枕

北枕は、仏典『大般涅槃経』に「その時世尊は右脇を下にして、頭を北方にして枕し、足は南方を指す。面は西方に向かい」とあるように、お釈迦さまが入滅されたとき、頭を北にし顔を西に向けられた姿（頭北面西右脇臥）の故事に由来します。

地球の磁場や気の流れから、インドでは北を上位として尊客の席とします。儒教でも「王者南面・臣下北面」という思想があり、以来寺院では、北から南に向いて座ることを南面といって説法位とするのです。

皇室には「北枕」のしきたりはなく、宮内省編集の「明治天皇紀」の記述によると、明治天皇のご遺体は頭を南にした「南枕」であったというが、上記の理由なのでしょう。イスラム教では埋葬の際は、イスラム教の聖地に頭を向けて埋葬するといわれ、キリスト教の埋葬では普通、頭を西、足は東といわれます。遺体をどちらに向けて寝かせるか、埋葬するかについては宗教や風習によって様々のようです。

納棺するまでの間、遺体を寝かせておきますが遺体をなるべく暖めないようにする為、掛布団は薄いものを用います。顔は白い布でおおい両手を胸のあたりで合掌させ手に数珠を持たせます。その寝かせ方は北枕にします。このように寝かせ直すので枕直し（まくらなおし）ともいいます。

北枕は縁起が悪いと言われますが、このようなところの連想によるものでしょう。けれども、これはお釈迦さまがクシナガラ（クシナガラ）の沙羅林で北向きに、そして獅子のごとく右側臥し、顔を西に向け、右手を顎につけて涅槃に入られた形でありますから縁起はよいのです。インドで教養ある人は、北枕に西面、右側臥であるといわれます。又、腹臥は餓鬼寝、仰臥は阿修羅、左側臥は貧窮人の臥相ともいわれますから、自然で安楽な臥相なのであります。

4. 枕飯（まくらめし・まくらえ）

枕飯の由来について『大般涅槃經』に「東方の意樂美音浄土という仏土があり、その虚空等如来が弟子に向かって『西方の娑婆世界に釈迦牟尼如来という仏がおられ、まもなく般涅槃される。お前はこの世界の香飯を持っていきなさい。この飯は香美で、食べれば安穩になる。かの世尊はこの香飯を食べてから般涅槃されるだろう』と。その命をうけた無辺菩薩が娑婆世界に来て、釈迦牟尼世尊のところに至って、『我等の食を受けたまえ』と申し出た。しかし如来は説きを知って黙念として受けられなかった」とあります。

無辺菩薩が香飯を差し上げようとしたのに、生前お受けにならなかったのが、入滅されてすぐにお供えしました。その風に従って死後すぐに枕飯を供えるのだという説があります。

もう一つは、『古事記』・『日本書紀』の神代の黄泉国ところで、死んで黄泉国にいった伊邪那美命に会いたいと、後を追っていった夫伊邪那岐命が「帰っておくれ」と語りかけるところがあります。そのとき伊邪那美命は、「早く来てくださらなくて、大変に悔しい。私はもう黄泉戸喫（よみつくべ）を食べてしまいました。」と答えます。

この「黄泉戸喫」は、黄泉国の竈で煮炊きしたものを食べることで、これを食べると死の国黄泉の国の者になりきって、生きていた国へは帰れないと信じられていました。「枕飯」は、この「黄泉戸喫」にあたるもので、死んだ人に、このご飯を食べたならばこの世に帰ってはならないということを知らせる標示として、箸を立てるのだともいわれています。これとは反対に、生死の境にある人の魂を食べ物の魅力で現世に引き戻そうとするためのものだという説もありますが、これは野辺送りのとき、喪主が墓場に持って行って置く習慣があり、さらにこのご飯を鳥などがついばんで早くなくなるほうがよいともいわれていることと考えあわせると、この説は俗言のようにも思われます。

枕飯を炊くときは、米は升では計らないで凡そ1合の米を、空の釜に先ず米を入れてから水を濯ぎ米をとぐ（米を綺麗にはとがない）。普段使用する竈は使わず、家の外で少し芯が残るように炊く（飯に魔力が宿るとされる）。炊いた飯は、炊いただけ残さずに盛り切ります。枕飯の茶ワンは生前使用していたものを用います。その枕飯の盛り方は大高盛といい、一杯で中味は二杯分あるように盛りあげるのです。このご飯に生前使用していた箸を立てます。神式は二本を揃えて立てますが、仏式は、一般的には箸を一本横にさし飾り止めとし十文字に立てます。箸をたてるのは「時空」をあらわし、横は「空間」をあらわすとも、縦は「火」をあらわし、横は「水」をあらわすともいれ、「火と水」によって清浄にし、永遠の香飯を供える作法とも考えられます。又、枕飯は、炊いただけ盛り切り、他の人には差しあげないというしるしに箸をたてる古代人の縁切り法ともいわれます。出棺時に、その生前の茶碗を割るという作法もあり、これも決別を死者に悟らせる風習といえましょう。

枕飯は人が亡くなってただちに炊くところもあれば、通夜の時に炊くところもあるようです。炊き方は、通常のカマドは使わず屋外に簡単なカマドを作ります。燃やす材料ですが、昔は棺や龕台、四華などの飾りを作ったクズ材料を使用したものです。米は（昔は玄米）とがずに半煮えで炊き、茶碗に山盛りにして箸を立てるのです。よく考えると、とがない米の半煮えでは間違いなくまずいものになります。このことは、振り米や洗米などのように米に呪術的な意味があり通常の如く丁寧に洗って柔らかく炊くとその力が減じられるとしたのでしょうか。

「箸の種類： 割り箸・利休箸・塗り箸・白木箸」

5. 一本華

葬儀の際、一本華または一色花を供える慣習があります。お釈迦さまが入滅される時に、お釈迦さまの十大弟子の一人であった大迦葉（だいかしょう）は遠く離れた処にいて、そこで一本の花を持った人に出会い、彼からお釈迦さまの入滅を知らされ、この花は彼の処より得て来たものだと語られたことによるといいます。又、入滅の時、沙羅樹の長い枝が垂れ下った因縁から来ているともいわれます。その為木の本でなく枝を折って立てるのです。一本華に桜を用いる地方や白菊を用いる地方がありますが、花器には水は入れませんし、平常の献花は真を立てますが、葬式の一本華は涅槃の意を表して枝を一本だけ

立てます。

普段、花を生けるときは、先ず花器に水を入れてから花を立てます。

ビショコは、名前の由来はサカキに似ているが、サカキではないということで「非ず」からヒサカキという説と、サカキに比べて小さいという意味での「姫榊」から来たという説があるそうですが、ビショコは榊の類に属しますので葬儀では使用しません。

6. まくら団子

お釈迦さまがお腹をいためて沙羅林におやすみになった時、食物がのどを通らなくなったので、弟子たちが消化のよい食べ物にしてあげたいと思って、食物をよくすって、丸めて団子にし枕もとへ置いてあげました。今なら流動食というところでしょう。しかしそれは、遂に一つも召しあがらないで、枕もとにお団子が残りました。

それを型どって団子が最後のお供えものになったのです。

全国的には枕団子の数は、6個が多いようですが、9箇・11箇・13箇であったり、四四の16個であったりします。4と死の相通からきているものと思われま

枕団子の作り方（11個の場合）

1. 餅米（又は新米）を臼でひき粉にして、熱湯で耳朶ほどの堅さに練ります。
2. 直径3センチくらいの団子を11個作ります。
3. 小皿を用意します。
4. 皿の真ん中に一個置き、その回りに6個置きます。
5. 7個の上に3個置きます。
6. 1番上に1個置きます。
7. 5分程度蒸して完成です。

7. 逆さ屏風

遺体のまわりに屏風を立て、枕元に刃物を置くのは、遺骸に他の邪霊や悪霊が入り込むことを防ぐためだといわれています。いったん息を引き取っても再び魂が戻ってくるようにと「魂よばい」をするわけですから、このとき他の霊に入り込まれては困るわけです。とくに、非業の死を遂げたり、祀りや供養をしてもらえない霊は、祖霊とも融合できず、いつもうろろして隙があれば魂の抜ける遺骸に乗り移って霊肉そろう人間に戻ろうとしているといわれています。この迷っている魂が、現実の動物の姿となったものが猫だともいわれています。愛猫家にとっては聞き捨てならない話ですが、ここから猫は魔性のものとされ、とくに不幸のときなどは遠ざけられます。猫が遺骸の胸の上を飛び越えたりすると、猫魂が遺骸の中に入り込んでしまうということから猫を近づけないために屏風を立てるといわけです。また、遺骸の下（床下）に猫等が入らないようにするために、簀の子も閉めます。

屏風をめぐるすのは、遺体を悪霊から守るため、あるいは死霊が周囲の人におよばないように、など土地により相反する言い伝えがあります。

8. 守り刀

北枕に寝かした遺体のフトンの上に守り刀を置く。守り刀は武士の死者にはその枕頭に刀を置いた名残ともいわれますが、一般には遺体の死臭をかいでそれをねらう悪鬼を防ぐ為とも、死者があゝの世にゆくときの魔除けとして刀を遺体の胸の土に置くという風習が行なわれていました。

守り刀は、現今では葬儀社の専用小刀となりましたが、安全カミソリや女性の場合にはぎりばさみを置くところもあります。まら、普段使っている鎌が使われ、埋葬後はその鎌をお墓の魔除けとしていました。刃先を遺体の顔の方向にむけないようにします。

9. 四華 (しか)

四華の白紙の由来は、お釈迦さまが涅槃に入られる時に沙羅双樹が白色に変じたという沙羅双樹林になぞらえています。ひいては死者が涅槃に入る清浄の境界を象徴していますので、金紙とか銀紙の四華もあるようですが、本義からいえば白紙の四華が正しいでしょう。四華は白紙を竹串に巻きつけ、横に細かくハサミを入れたものです。四華は棺の飾りに使う紙製品で、葬儀(葬式)の際は仏具と一緒に飾られます。地域によっては、四華を棺の四隅に飾る風習がある所もあります。かつては四華を大根や木の台に突き立て、近親者が持って葬列に参加し、埋葬した土地の四隅にこれを置くところもあり、魔避けなどの呪術的な用い方をしたとも考えられます。近年では葬列がなくなったため、四華を立てることはあまり見られなくなりました。

10. 最後の水

人が死に瀕したときや、死の直後には、その場に立ち会っている人が、櫛の葉1枚、若しくは新しい割り箸の先に脱脂綿やガーゼを白糸でくくったものに水をふくませて、くちびるをぬらしてあげることを最後の水、あるいは死水ともいうのです。最後の水の起源については、仏典『長阿含経』の中に、「末期の水」の由来となる話がのっています。「末期を悟られた仏陀は弟子の阿難に命じて、口が乾いたので水を持ってきて欲しいと頼んだ。しかし阿難は河の上流で多くの車が通過して、水が濁って汚れているので我慢して下さいと言った。しかし仏陀は口の乾きが我慢できず、三度阿難にお願いをした。そして『拘孫河はここから遠くない、清く冷たいので飲みたい。またその水を浴びたい』とも言った。その時、雪山に住む鬼神で仏道に篤い者が、鉢に浄水を酌み、これを仏陀に捧げられた」とあります。

この鬼神はヒマラヤの守護神で、仏陀の危篤を知って八つの功德水を持って来られたのです。仏陀は、この甘露水をのんで満足して瞑目された。これが仏典にある「末期の水」の由来です。

最近、死亡の認定を心臓が止まったときとするか、脳死のときとするかが大きな問題となっていますが、昔の人は仮死状態と死とを今のように科学的に判別することができませんでしたから、息を引き取ってある時間を経過してから死と認めていました。人間には霊魂があつて、霊魂が肉体を離れたときに仮死状態となり、そのまま帰ってこなければ死となるわけです。したがって、息を引き取ったあとでもすぐに死んだものとはせず、なんらかの方法で魂を呼び戻し、蘇生させようとしてきました。枕元で大声で呼びかけるのも、近親の者が口に水を含ませる「死水」も、魂を呼び戻すための手段でありました。

11. 告げ人は二人の訳

死亡の通知を寺や村人に告げに行く時は、一人ではけっして行わず、二人で対になって行くものとされていた。それでも、どうしても一人の行く場合には小石を持ったり他人の名前を書いた紙を持っていった。いずれにしても、これは悪魔除けにつながるものです。ちなみに石は納棺の後、蓋を釘で打ち付けるとき金槌ではなく石を使う。土葬の時には埋葬した上に後石を置く。これらは、一般的には死霊が暴れ出さないようにと解釈されているが本当は悪魔がつかないようにとの呪術であろう。何故かと言うにアフリカの民族宗教では葬儀の後手を石にこすりつけてケガレをはらう。エジプトでミイラを作るときには金属ナイフではなく石包丁を使ったという。ゾロアスター教では現在も死者の安置は石板の上であるという。ゾロアスター教でも葬儀の儀礼は二人一組で処理にあたる。一人だと悪魔に負けるからだという。

1 2. 湯灌(ゆかん)

遺体を棺に納める前に、遺体を湯水で拭き清めるのが湯灌です。現在、都会においてはアルコールをガーゼや脱脂綿にひたして清める方法に変わって、湯灌は形式となって額と手足を拭くぐらいです。敷き布団は一枚、新しいシーツに寝かせます。掛け布団は天地逆にする場合もあります。目と口を閉じ、姿勢を整え、男ならビゲを剃り、女ならば薄化粧をします。病み疲れて、ほおがこけているような時には、ふくみ綿をします。遺体を清めたら衣装を整えますが、手っ甲と脚絆は納棺の時につけます。手は胸の上で組ませ、数珠をかけます。こうした一連の内容を行なう為に本来はごく近親者だけで行ないます。

亡くなった人が冷めたくないようにと適温にするのは身内のおもいやりですが、湯灌に使う水の汲み方や使った水の捨て方にも作法があります。まずタライに水を入れておいて、そこに湯をそそぐ(さかさ水)や、左手で杓を持ち手のひらを返して水を注ぐ(逆手)の習俗があります。また、使い終わった湯は台所には捨てずに、床下や日陰に流し、これに用いたサランや手拭は人の見えないところに捨てるのです。こうした作法は日常の作法と全く逆の方法で行なわれます。湯が陽のあたらないところに捨てるのは、忌の害を防ぐためといえます。

また、身体を清めるだけでなく、死者の魂を復活させるという呪術的な意味が込められているとも言われています。

1 3. 死化粧

湯灌の後は、遺体のまぶたをなでて閉じてあげます。枕が低いと口が開きやすくなりますが、口が開いていたなら包帯などでしばらく支えておきますと閉じます。髪をととのえ、遺体を清め男性なら髭を剃り、女性は薄化粧をして安置します。闘病でほおがこけていたら、ほおに含み綿を入れてあげるとよいでしょう。

髪や頭髪を剃るときは、大根の汁を多く塗って剃るとよい

1 4. 死装束

昔は、死に装束として、経帷子(きょうかたびら)を着せた。

経帷子は、白木綿を、はさみをつかわず裂いて裁ち(短めの対(つい)たけに)、肉親の女性何人かで、結び玉も作らず、返し針もしないで、縫い放しにつくったものです。

経帷子を左前に着せ、手甲、脚絆(きゃはん)をつけて、白足袋にわらじをはかせ、胸に三途の川(さんずのかわ)の渡し賃である六文銭を入れた頭陀袋(ずだぶくろ)を下げ、数珠を持たせた。

地方によっては、このしきたりを守って着せるところもありますが、都市部では、故人が愛用した衣服が用いられます。経帷子一式(木綿やナイロンなど)を一緒にお棺に納めることが多くなりました。

勝矢 珠容子(株式会社勝矢和裁 代表取締役)より

昔、赤ちゃんが誕生した時に産着を縫いました。それは白衣の反物にはさみをいれることなく、折って縫うという和裁士の高度な技術で出来上がりました。(故上田美枝先生発案)そして女の子なら、お嫁入りの時に産着をほどこき、花嫁衣裳の打ち掛けとなったのです。そして、お嫁入りした後、その打ち掛けをまたほどこき、このとき初めてはさみを入れて、白装束(死装束)を誂えて箆笥の奥にしまったのでした。

それは、生命の誕生をお祝いした汚れのない白い産着から、人生の伴りよと巡り合ったお祝いの衣装となり、そして人生を終える者と、見送る方々の感謝という相互の愛情を持って一つの物語に終止符をうつのです。

私は、最愛の夫を見送る時に、とても平常心ではいられませんでした。

和裁という技術を仕事としているにも関わらず、お葬式をすませずいぶん時が経っ

て、その時に白装束の粗末なことが思い出され、今も一つのしこりとなって心に残ります。後になって気付いてもどうしようもないのです。生前に用意するのは縁起がいかとも伝え聞きます。

私と同じような悔いを残されませんように、白装束をぜひ箆笥の奥におさめておいて下さい。

15. 忌と喪

忌とは身をつつしむという意味です。忌の期間は四十九日で、忌中と呼びこの期間は慶祝行事への参加はひかえます。喪とは喪服を着て故人の冥福を祈りつつしんだ生活をしている期間のことを意味します。

わが国では昔から忌服の制度があり明治七年に布告された「服忌令」によると、父母の死亡した場合の忌み日は五十日、服日は十三カ月。夫の場合は三十日に十三カ月。妻と嫡子の場合二十日と三カ月というように、忌服の期間が定められています。しかし、現在ではほとんど守られておりません。

死亡した日から数えて一年間は、祝事の主催はひかえ、年賀状は出さず、十二月初めに喪中につき年賀欠礼の挨拶状を出しておきます。又、正月の飾り、年始回りなどは遠慮し、神社へ参拝することもひかえるのが一般的です。この一年間は、心身をつつしみ、できるだけ華やかな俗事から遠ざかり、故人をとむらう心がまえでいたいものです。

16. 逆さごと

葬儀に関係するものごとでは、通常の逆に行なう「逆さごと」というものが行なわれています。

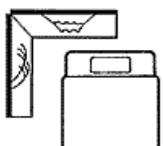


◎ 左前 : 相手から見て左の衽 (おくみ) を上にして着物を着せませす (普通は右前)。

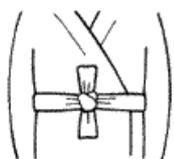
◎ 逆さ着物 : 亡くなった人の衣装をさかさまにしてかぶせませす。襟を足のほうにして着せるので、逆さ着物といひませす。
足袋を右左逆にはかせたり、洋服の裾を顔の方に着物の襟を足元に掛ける



◎ 逆さ水 : 水にお湯を注いでぬるくしませす。湯灌 (ゆかん) の際などに行ひませす。



◎ 逆さ屏風 : 屏風の絵柄を天地逆にして枕元に立てかけませす。



◎ 縦結び : こま結びを縦に結んだもの。普通は横に結ぶことの逆をしませす。

17. 喪服

古くから忌服の制度があり明治7年には武家の忌服制に基づき太政官布告の「忌服令」がだされています。喪服は、凶服ともいわれており、父母・妻子、親戚等の「忌服」の間は、喪服を着ることが定められていました。「忌服令」にある「服」とは喪服を着るべき期間のことで、服の者は神事に携わることは禁じられ、また公式行事にも参加できませんでした。服喪期間がすぎて、これを脱ぐことを除服といい、河原や門前で行ないました。

このように、もともと遺族のみが喪服を着ることが義務づけられており、一般会葬者は喪服を着る定めはなかったのですが、大正後期から、一般会葬者も喪服を着用するようになってきました。また遺族も喪の期間を通して着服することはせず、葬儀の時にのみ喪服を着るように変わってきました。

●通夜の会葬者の喪服

通夜には喪主や遺族も正式喪服ではなく、略式にしています。男性は黒のスーツに白のワイシャツ、黒のネクタイと黒の靴下です。和装では少なくなってきましたが、黒っぽい無地の小紋の着物に、一つ紋か三つ紋の羽織、袴をつけます。

女性の場合は黒無地のワンピースまたはツーピース。和装なら、黒無地か地味な無地のものにします。

●葬儀・告別式の会葬者の服装

遺族や近親者、世話役代表（葬儀委員長）は、正式の喪服を着用しますが、その他の一般弔問客は略式の喪服でよいでしょう。略式の場合、男性はダークスーツに黒ネクタイ、黒の靴下でよいでしょう。

女性の場合、黒のワンピースかツーピース。和装なら黒の一つ紋の着物、帯やハンドバックなども黒の物を用います。アクセサリはつけませんが、真珠ならかまいません。

喪章は、遺族が喪に服していることを示すものですから、世話役などで喪家側の人間としてお手伝いする場合にはつけますが、一般の会葬者は着けません。

喪主（男性）の正式喪服

和服の場合、黒羽二重の染抜き五つ紋付きに羽織袴で、慶事と同じ装いです。袴は仙台平で、帯は角帯。下着の衿は羽二重で、白、ねずみ色などを用います。下着の衿は弔事には重ねません。足袋は白が正式ですが、地方によっては黒が用いられています。



洋装の正式喪服は、黒のモーニングに黒のネクタイです。チョッキはシングルで、上着と共地です。ズボンは縞柄で、裾はシングルです。モーニングは昼間の礼装ですので、通夜では黒のスーツがよいでしょう。



喪主（女性）の正式喪服

和装の場合、関西では地紋のない縮緬、関東では羽二重に染抜きの五つ紋をつけた黒の無地が正式とされています。夏の喪服は、あわせと同じ五つ紋付きの黒無地で、六月と九月がひとえ、七、八月は縞が正式とされていますが、帯は、縞か紗の黒の名古屋帯が一般的です。

通夜は、色無地に黒帯です。



洋装の正式喪服は、黒無地のワンピース、スーツ、アンサンブルです。ボタン、バックルは、共布か光沢のない共色にします。黒は飾りのない黒のパンプスが正式です。アクセサリは結婚指輪以外はつけないのが本来です。



※女性の喪服の注意点

男性の場合、ブラックスーツを着用すれば、喪服として間違いありません。女性の場合もブラックフォーマルコーナーで購入したものであれば問題ありませんが、手持ちの服で間に合わせる際には迷うことがあるかもしれません。その際に注意することとして、次の3つをあげておきますので目安にしてください。(1) 光沢のあるもの、透けるものは避ける。

(2) 夏場でも袖のないものは避けて肌の露出を控え、シンプルなデザインのものにする。

(3) ブラウスを着用する場合、黒にする。葬儀という式に参列するのですから、それなりの礼節を保ちたいものです。

●学生、子どもの服装

学生は、男女ともに制服が喪服となります。なければ黒または地味な服装（グレーなど）に、腕章を右腕に巻くか胸に喪章かリボンをつけます。靴は黒、靴下も黒か白いものを使用します。また真夏には、男子なら白のシャツに黒ズボンと黒靴、女子なら白のブラウスに黒のスカート、黒靴がよいでしょう。

●キリスト葬の場合キリスト葬の場合には、男子の正式喪服はモーニングとなっています。ネクタイは黒、手袋は黒か灰色です。女性の場合には黒色が正式ですが、カトリックに属している方は黒かそれに近い色のベールをかぶります。

●法要の服装

忌明け法要などには、喪服に近いものを着ますが、一周忌、三回忌と回を重ねるにしたがって、喪の表現は少なくしていくのが一般のしきたりです。

一般的には地味な平服で差し支えありません。男性はダークスーツにネクタイ、靴下も派手なものでなければ、黒にそろえる必要はありません。女性は、色無地の着物に黒帯か、洋装なら黒でなくとも、地味なワンピースやスーツならよいでしょう。アクセサリは目立たないものにします。

おおよそ三回忌までは略式喪服を着るようにするのが無難でしょう。

※ホテル、料亭で法要を行う場合には、地味なスーツで出席する人がふえてきました。

18. 釈尊の父の葬儀

釈尊が68歳の年、ヴェーサーリの大林精舎で雨期を過ごしていた。そこに釈尊の生まれたカピラ城から使者が来た。釈尊の父である浄飯王が自らの死期を予知し、息子に会いたいという知らせであった。釈尊は浄飯王の病いの知らせを受けると、弟子たちを伴いカピラ城へと出発した。釈尊は王を見舞い、宮中の人々に仏法を説いた。釈尊がカピラ城に着いてから7日目に王は息を引き取った。王が崩御されると、釈尊は重臣たちと葬儀の準備を進めた。たくさんの香料を溶かした汁で王のからだを洗い、きれいに拭きとったあと、絹の布で全身を覆い棺に納めた。7つの宝石で遺体を荘厳したあと、棺を台座の上に安置し、真珠で編んだ網を垂れめぐらした。そのあと華を四方に散らし、香をたいて死者を供養した。棺を葬場に送る際、釈尊は親の恩義に報いるために自ら棺をかついだ。釈尊の弟、子供、従弟も棺をかついだ。親に対する最後の孝行は、その遺体を最後まで守ることだろう。この棺をかついだ4人は、浄飯王の子供、甥、孫にあたる。日本の葬儀において、故人の実子、兄弟、孫と言った血縁の者が棺をかつぐ習慣がある。これは釈尊を始めとする因縁の深い人々が、浄飯王の棺を擔いで葬儀を営んだことに由来している。

明治7年制定 大政官布告による忌服令

(参考)

続柄	忌日	服日	続柄	忌日	服日
父母	50日	13ヶ月	異父母兄弟姉妹	10日	30日
養父母	30日	150日	祖父母	30日	150日
夫	30日	13ヶ月	曾祖父母	20日	90日
妻	20日	90日	孫	3日	7日
嫡子	20日	90日	伯叔父・伯叔母	30日	90日
養子	10日	30日	従兄弟・従姉妹	3日	7日
兄弟・姉妹	20日	90日	甥・姪	3日	7日